

特集を振り返って

オオルリシジミの絶滅危機の状況を通じて自然を考えることが大切では…。

以前「オオルリシジミって何？食べられるの？」という笑話を聞いたことがあります。最近になって新聞等による報道から多くの人に知れ渡るようになりました。

守る会でも「オオルリシジミを広く知らせることによって、平成5年にあった乱獲の時のように採集者が多くなるのではないかと心配する会員もいましたが、「市民にもっとオオルリシジミを知ってもらい、市民全員で守っていくほうが良い」との決断により、報道や市報の取材を受けることになったのです。

この取材を通して、守る会、小学校など、地域全体で「自分達が守っていくんだ」という気持ちが強くあることをひしと感じました。

また、オオルリシジミだけを守れば良いというよりも、その他の動植物も含めた自然全体を守る必要があることも分かりました。

「生物はその種類だけでは生存できない。たくさんの動植物のバランスの中で生きている。だから人間もどのように自然と接すればよいかを考え、自然を愛し、大切にしていくなか気持ちを持って欲しいです。」と内川先生は話します。

大人達には、自然をもう一度見つめ直して大切な宝物を子供たちに伝えてほしい。子供達には、もっと自然に接して生き物の命、そして人の命の大切さを育んで欲しい。

東御市の豊かな自然を象徴するオオルリシジミを通じて、すべての市民や行政が改めて自然に触れ直し、必要な学習、啓発や保護の取り組みを地道に積み重ねていくことが重要なのではないのでしょうか。そして、こうした取り組みが結果として自然を守り、子供達に伝えていくことにつながるのではないのでしょうか。

写真提供協力  
 ・内田 滋さん ・矢嶋広道さん  
 ・西尾規孝さん ・清水敏道さん

参考図書  
 ・藤岡知夫、1982年、日本産蝶類大図鑑、講談社  
 ・福田晴男ほか、1984年、原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ)、保育社  
 ・田下昌志ほか、1999年、長野産チョウ類動態図鑑、文一総合出版

「オオルリシジミを育ててみないか？」  
 「やってみたい、ぜひきれいなチョウを見てみたい」  
 「うん、育てよう。みんな育てよう！」  
 「じゃーん、これがみんなの宝物のさなぎだよ」  
 「え、オオルリシジミのさなぎって、こんななんだ。なんだか黒い豆みたいだね・・・」  
 「すっごくきれい！、かわいいー」  
 「黒いさなぎがチョウになるなんて不思議だなあ。」  
 「がんばれ、がんばれ！殻をやぶって出て来い」  
 「まだかな、まだかな・・・」  
 「出てこない、あれ出てこない。死んじゃったよ。なぜ死んじゃったの？」  
 「羽化不全といって、さなぎの状態で死んじゃうのもあるんだよ・・・」  
 「ちっちゃくてどこに卵があるのか分からないよ！」  
 「そー、そー」  
 「幼虫ってプニプニしていて、こいつかわいいなあ」  
 「ピンク色もかわいいよ」  
 「先生、僕たちこのままずっと育てていけばいつか野原でも見ることができるようになるよね。」  
 「いつ日か、その日がくるまで頑張ろうね！」  
 「そうだね。そして、みんなの宝物、大切にしていこうよ！」

北御牧小学校内科室にて

